

第 8 回 国立公園満喫プロジェクト有識者会議

議事要旨

1. 日時：平成 30 年 6 月 29 日（金）13：30～16：15
2. 場所：航空会館 702+703 会議室
3. 出席者：

（政府側）

中川雅治環境大臣、とかしきなおみ環境副大臣、森本英香環境事務次官、亀澤玲治自然環境局長、米谷仁大臣官房審議官、永島徹也総務課長、田中良典国立公園課長、池田幸士自然環境整備課長、西村学国立公園利用推進室長、辻本慎太郎国立公園官民連携企画官、山本麻衣温泉地保護利用推進室長、水崎進介国立公園課課長補佐、伊東和宏 JNTO グローバルマーケティング部部长、松井章二林野庁経営企画課国有林総合利用推進室課長補佐、蔵持京治観光庁観光庁観光資源課長

（有識者・50 音順、敬称略）

デービッド・アトキンソン（小西美術工藝社社長）

石井至（有限会社石井兄弟社社長）

江崎貴久（旅館海月女将、有限会社オズ代表取締役）

野添ちかこ（温泉と宿のライター）

星野佳路（星野リゾート代表）

涌井史郎（東京都市大学環境学部特別教授） 座長

4. 議事概要

○中川環境大臣より冒頭挨拶

2016 年に国立公園満喫プロジェクトにおいて、先行的・集中的に取り組む 8 つの国立公園を選定して以降、これらの国立公園を中心に取組みを進めてきた。今年度は本プロジェクトの中間となる年になるため、中間評価を行い、さらに効果的に取り組むを進めていきたい。本日は先行している 8 つの公園の地域協議会においてなされた中間評価と、プロジェクト全体の中間評価についてご説明させていただき、2020 年までに訪日外国人の国立公園利用者数を 1000 万人にするという目標の達成に向け取組みを加速化していくため、有識者の皆様からご助言をいただきたい。限られた時間ではあるが、本日もどうぞよろしくお願いしたい。

○資料確認

議事（1）国立公園満喫プロジェクトの実施について

○事務局から資料 1、資料 2-1 に基づき説明

○阿寒摩周、十和田八幡平、日光、伊勢志摩について、各公園から中間評価結果を説明

【アトキンソン委員】～阿寒摩周国立公園を視察して～

- ・ 全体的には、以前来た時よりは改善しているという印象を受けたが、道路表記や座る場所の整備など、簡単にできることができていない。素晴らしい動画をいくつも見たが、その予算があるならば、もっとシンプルなことをやればいいのではないかと感じた。
- ・ 物理的な整備と、情報発信のバランスをもう少し考えた方がよい。他の観光地の観光整備にも当てはまるが、情報発信やイベントに走っている。一方で、その資源の付加価値の向上や磨き上げが遅れていると感じる。情報発信は重要だが、観光客が実際に行ってみてがっかりするようであれば失敗に終わる。もの自体がすばらしければ、SNSで来訪者自身が情報発信をしてくれる。情報発信を否定するつもりはないが、先に取り組むべきことがある。
- ・ 硫黄山では、何も整備されていない一方で、ビジターセンターには素晴らしい動画があった。取り組む順番が逆だと感じた。来てもらいたいという気持ちは分かるが、カスタマーエクスペリエンスは改善していないという点を一番危惧している。
- ・ 多言語対応にも依然問題がある。観光庁・文化庁・環境省が多言語対応の方針を定めたにも関わらず、最近できたものでも、文意の通らない訳が数箇所見受けられた。仕様書どおりであれば、ネイティブチェックを行い、きちんと書き起こしたものになっているはずだが、業者が十分対応できていない。また、業者が対応するようにチェックが行われていないというのは残念なことだ。補助金を出している以上、責任を持って業者・チェック側ともに力をいれるべき。
- ・ 資源そのものは、前回来訪時と大きく変わっていない点が残念であった。

【野添委員】～十和田八幡平国立公園を視察して～

- ・ 日本が誇るべき優れた湯治文化・湯治宿が非常に多く残っている。たとえば、火山の熱で温められたオンドル部屋がある後生掛温泉、湯気が立ち込める地獄地帯の中で混浴をする蒸ノ湯温泉 ふけの湯、千人風呂といわれる混浴風呂を持つ酸ヶ湯など、東北が、そして日本が誇るべき温泉宿が数多くある。こういった場所は、特にPRをしなくても、外国人客が自分で調べてやってくる。あるいは、宿が宣伝せずとも県のポスターに採用され、多くのお客様が来訪したというところもある。
- ・ 必ずしも多言語化をした方がいいとは限らない。不便なところも一つの異文化体験なのではないか。湯治場の温泉が必ずしも便利なホテルになる必要はない。それも含めた湯治文化であり、不便なところが残っているところも、日本の温泉宿の魅力ではないか。
- ・ 廃屋については本腰を入れて対策を考えなければならない。今回の視察で一番ショックを受けたのは、十和田湖畔エリアに廃屋が13軒もあったこと。しかも小型の商店ではなく、大型のホテルである。バブルの頃から徐々に経営が冷え込み、震災のあと廃業

したところもあると聞いた。これらの廃屋は一見空き家のように見えるが、所有者はいる。国立公園内だから、国が予算を出す……というのは都合のいい話だが、自力では再建できない状況になっているので、対策を考えるべき。今年度、国立公園満喫プロジェクトの一環として一軒解体するようだが、残りの12軒はどうすべきか。地域だけでなく、環境省も一緒に考えていくべき問題だ。

- ・ ガイドの地位向上、育成も力を入れるべき。十和田湖畔にある十和田神社は、霊場・パワースポットである。朝に若いガイドが案内するツアーがあり、日本の歴史などが学べ、非常に面白かった。

【キャンベル委員※欠席のため事務局から事前に伺ったことを説明】～日光国立公園を視察して～

- ・ JR 日光駅のインフォメーションセンターと、英国大使館別荘記念公園は多言語対応が非常に優れていると感じた。JR 日光駅は、駅に着いた際のインフォメーションセンターへのアプローチが明快。窓口が一箇所、インフォメーションセンターに求められる案内機能に特化しており、英語対応者の常駐による窓口の対応、タッチパネル式のタブレットによる検索が可能であり、外国人でも利用しやすい環境だった。英国大使館別荘記念公園では、コンセプトの整った展示内容や、その多言語化の状況、中禅寺湖のほとりで景色を眺めながらゆっくりすごせる空間作り、イギリス風のカフェの併設など、一つのモデルになるものと感じた。そこへいくだけの価値がある。
- ・ ビジターセンターとしては、那須平成の森フィールドセンターがコンテンツとしてすばらしかった。ガイドの常駐やツアーの充実、工夫をしたミニプログラムなどがあり、フィールドに入る際のゲート機能、来訪者が必ず通る入り口にあって、自然体で情報が得られる。来訪者への情報が届きやすい強みがある。カフェの取り組みもよかった。インバウンドに向けても、ポテンシャルが非常に高い施設であり、多言語化など、今後も強化して行ってほしい。
- ・ 個々の施設や団体ごとにバラバラと情報発信や多言語化を行うのは、利用者にとっては分かりづらく、不便であると感じた。また、固定的な情報システムの枠組みは、一度整備することで長年利用可能ではあるが、イベントや旬な情報を各事業者が英語化して発信するのは、現場の人々にとってハードルが高い。このため、個別の事業者の発信する情報を吸い上げてまとめて発信し、予約対応できるような、新しい情報集約・更新・発信の体制や仕組みを構築する必要があると感じた。

【星野委員】～伊勢志摩国立公園を視察して～

- ・ 土地に対する愛着を持った方が一生懸命やってらっしゃるので、必ず成果が出てくるだろうと思いながら、楽しい二日間を過ごした。
- ・ 伊勢志摩国立公園は自然だけでなく、文化・生活・それにまつわる食の魅力がある。そ

の観点で、気になった点が8項目あった。

- ・ 魅力のフィット感が足りない。ビューポイントやエコツーリズムの団体、魅力あるポイントが広範囲に散らばっている。10個20個あるコンテンツが、ある顧客、たとえば欧米人のエコツーリストからは魅力が3に見えていて、一方でマスツーリストからは6に見えていたりする。ターゲットを絞って魅力のフィット感を整えるともっと強くなると思う。コンテンツの数は多いが、それぞれがターゲットとしている層が別々だったりすると、顧客視点から見たときに、魅力的に見えているのか不安。
- ・ スペイン村の影響がいまだに大きい。スペイン村は、バブル期に建設された、国内集客を企図したテーマパークだが、その影響が残っている点が問題だ。例えば横山園地のカフェで民間に委託するという話があったが、そのカフェにもスペイン語がついており、違和感がある。スペイン人が来たら変に思うのではないか。なぜここにスペインのカフェがあるのか。横山カフェでよかったのでは、というのが正直な感想。
- ・ 国立公園内の展望台に併設されたカフェで使用するのが紙コップやプラスチックのストローでいいのか。世界のエコツーリストが見たらどう思うか。国立公園の中なのだから、さすがだと思われるように、厨房に洗浄機を置いて、リユース・リサイクルできるものでカフェを提供すべきだと思う。この公園に限った話ではなく、今後国立公園にカフェを作る上で統一した概念があると、さすが日本の国立公園だ、と言ってもらえるのではないかと感じた。
- ・ トイレが和式であること。日本人に人気でどうしても欠かせないというなら仕方がないが、観光の世界では日本人にも不人気だ。こういう所こそ改善を加速化していき、どんどん洋式に変えたほうが良いと思う。
- ・ 多言語化のスペルミスが多い。民間のエコツーリズム団体などを視察して、外国人対応をがんばっているところを見てきたが、スペルミスが多い。安易に多言語化に走ってスペルミスをして恥をさらすくらいならいっそ書かない方がプライドを感じる。スペルミスは、どうすれば無くすことができるか検討しなければならない。
- ・ 国立公園は範囲が広い上、電車があまり走っていない。この広範囲を周遊してもらうための一つの課題は、交通手段。3000円のプログラムを受けるのに、4000円のタクシーに乗っていくような状況。地方の観光地では、ライドシェアを行うことを本格的に考えた方がよいと感じている。ライドシェアというのはウーバーのようなサービスのことだ。地域でそういったサービスができないか。民泊以上に課題が多い問題ではあるが、地方こそ、シェアリングエコノミーが重要ではないか。
- ・ 空き家による景観阻害も課題。十和田湖畔ほどではないが、伊勢志摩にもバブル時代の置き土産がある。これらを削ることで、景観をよくしていけないか。電柱についても、地中化することによって景観をよくしたい。
- ・ 伊勢志摩国立公園には、展望台、カフェ、魚の養殖のエコツーリズム、カヤックなどのすばらしいコンテンツがあるが、目指すべきところはマスツーリズムではなくエコツ

ーリズムだと実感した。例えば展望台などで、大型バスが回転できるような駐車場を設計するのは大変だろう。上質なお客様に単価を払っていただいて、単に利用者数を増やすというよりは、質の高いコンテンツを提供するほうが、フィット感が高いのではないか。団体客を対象とせず、上質なお客様にお金を払ってもらえるよう、付加価値を高めるのが重要。国立公園満喫プロジェクトでは、公園への来訪者を増やすという目標が掲げられているが、マストーツリズムを目指すのではなく、エコーツリズムを質的に改善し、世界に誇れる国立公園観光を目指すべきではないかと感じた。

○大山隠岐、阿蘇くじゅう、霧島錦江湾、慶良間諸島について、各公園から中間評価結果を説明

【涌井座長】～大山国立公園を視察して～

- ・ 国立公園を抱える一番のゲートウェイ、母都市がしっかりとした考えをもって取り組むことが重要。視察を通して、現場はかなり頑張っていると感じた。公園内の地域関係者も本プロジェクトに注目して熱心に取り組んでいると感じた一方、米子や出雲のような母都市となる存在が、公園内の関係者と比べてやや意識が薄いように感じた。
- ・ 国立公園では、訪問客が一体的に共有できるサブストーリーやコンセプトがほしい。日本の国立公園は営造物型ではないため、同質の自然景観や生態学的な条件を持てば一つの国立公園となるが、訪問客からすると非常に分かりにくい。例えば、大山では、自然に触れることによって体の健康だけでなく、神話や信仰、それを支えるのに相応しい自然共生や利活用の知恵を感得しながら“心と体を洗いがえる”というテーマが、共通のテーマとしてあるのではないかと感じた。
- ・ 距離は離れていても同じ歴史文化圏の中にあるという、広域的なくくりをどのように訪問客にイメージとして伝えるかが重要。古代出雲大社の高い社殿に用いられた木材が、三瓶山の埋没林の展示から見て古代にはこのような巨木が林立していたと想像させるだけで、訪問客に歴史への地域イメージが共有できる。科学的な裏付けが無くとも、それを想起させるヒントが現物として存在する点に、大山という山岳信仰と出雲神話に心が引き寄せられる歴史的な奥深さを感じた。
- ・ 母都市・拠点都市では、マストーツリズムに対応し、国立公園の中では、消費額の高い観光客を受け入れられる設えを用意し、高品質であるが故にキャリングキャパシティを犯さないハードな設えとプログラムを考えて頂きたい。

【石井委員】～大山隠岐国立公園を視察して～

- ・ 隠岐は、ここ数年で訪れた地域の中で特に素晴らしい場所だと感じた。
- ・ 知夫里の赤壁は、迫力もあり非常にインパクトもあるが、携帯の電波もWi-Fiも入らないのは課題。今は訪問客がSNSを通してその場で情報発信をしてくれる時代。電波を通

すためには、電波塔を建てるだけでなく、電気が必要となるため、環境省もしくは観光庁には、ぜひ電気調達の支援についても検討していただきたい。

- ・ 海士町は、後鳥羽上皇が島流しにあってから考えると来年がアニバーサリーイヤーである。地元でイベントを開催したいという話があったので、文化庁のプラットフォーム事業を紹介した。
- ・ 隠岐-伊丹間で J-AIR の大型便が運航し始めたということで、知り合いに連絡を取り、JAL の 11 月号の機内誌で特集してもらうように依頼した。
- ・ 隠岐への訪問観光客は、現在はフランス人が多いと聞いたが、これからは香港も重要市場としてプロモーションを始めようとしているとのことであった。
- ・ ジオパーク協議会が非常によく機能していて、四つの町村が連携し、熱意をもって様々な取組を行っている。観光地として活性化する条件が揃っているのも、上手に取り組みれば目標人数への達成だけでなく、消費額の向上も見込めるだろう。

【野添委員】～阿蘇くじゅう国立公園を視察して～

- ・ 災害復旧の途上であり、未だ地震や噴火による被害の跡が残されている。阿蘇火山博物館の入込では、災害前は 21 万人であったのに対し、1 万 8 千人にまで落ち込んだと伺った。国立公園満喫プロジェクトの予算が、ビジターセンターの整備や火口の散策路の整備にも使われているということで、地域からの並々ならぬ期待があると感じた。
- ・ 宿泊については、アジアに近いということもあり、かなり早い段階から外国人を積極的に受け入れている施設が多い。国立公園満喫プロジェクトに対しても、プロジェクト単体として捉えるのではなく中長期的に見据えながら取り組んでいるという印象を受けた。三愛高原ホテルでは、涅槃像が見られる場所で、スノーピークと共同でグランピングをオープンさせる予定とのこと、非常に注目度の高い取組であると感じた。
- ・ 黒川温泉では、宿泊せず、大型バス何台かで乗り付けて「里山の温泉地散策」と称して観光だけして帰る外国人客向けツアーを販売する旅行会社も出てきている。一方、FIT に関しては各宿泊施設によって外国人の受入れ状況も戦略も異なるため、中々足並みを揃えることは難しいのではないかと感じた。
- ・ 観光客数やお金の指標では測りきれない小さい取組について、どのように評価していくか考えなければいけない。一日一組しか受け入れていない里山料理を出す食事処や、車掌が演者のように地域の紹介をする南阿蘇鉄道の取組など。これらの小さな観光資源は、外国人観光客にもきっと喜ばれる非常に魅力的なものではあるが、数やお金の指標では反映されないだろう。
- ・ 由布院温泉では、複数言語の対応を進めるのではなく、デザインを重視し、言語は日本語と英語の最小限にとどめ、他はピストグラムで分かりやすく表示するという方法を採用している看板もある。街づくりの観点として有効ではないかと感じた。

【江崎委員】～霧島錦江湾国立公園を視察して～

- ・ 火山という自然資源だけでなく、それとともに暮らす人が魅力であると感じた。外国人観光客にも、火山の近くで人が生活しているということが信じられず、非常に興味を持たれるようだ。今後の課題は、暮らしている人をどのように伝えていけるか。
- ・ 国立公園満喫プロジェクトの支援で、地域に多くのガイドチームが多く立ち上がったと伺った。人を後押しする取組に力を入れているところを拝見し、このプロジェクトが有意義なものであると実感した。
- ・ 個々のカルデラの説明にとどまるのではなく、全体のスケール感を伝えられるような工夫があればよい。どの地域でもカルデラと火山を間近に感じることができたが、広域にわたる壮大な地形であるため、全体としての大きさが伝わらなかった。
- ・ 周遊バスの取組はぜひとも継続して頂きたい。
- ・ 母都市の人々に意識を持って頂くことが重要。今回の視察で利用した鹿児島からのタクシー運転手は、国立公園満喫プロジェクトについて知らなかった。母都市でも、取組を認知していれば士気もあがるはずであるので、インナープロモーションなどを行って頂きたい。

【江崎委員】～慶良間諸島国立公園を視察して～

- ・ 呼び込む観光客のターゲットについて、「これまで来て頂いている観光客を大事にしたい」という考え方は、非常に素晴らしいと感じた。これまで来ている観光客は保全意識も高く、島を大事にしてくれるという意識があるのだろう。
- ・ 素晴らしい景色が途切れずに見られる点がよい。島のすべての展望台へ訪れたが、どの展望台からの景色も素晴らしかった。今後は、山の見せ方も含めて展望台の使い方を考える必要がある。
- ・ ビーチでは、遊泳区域から外れたところパラソルが立っているのは残念に感じた。また、保全こそがブランディングの地域のビーチに、エージェントのパラソルが多く立ち並んでいる状況には違和感を覚えた。
- ・ 以前運行していたヘリコプターのように、船が運休になった際の代替手段があればよいと感じた。
- ・ ホテルを除き、現在の宿泊事業者は、他の観光地とは違い、宿泊とアクティビティを両方展開している。この二つは、観光業の中でも最も人手と手間、時間を要する商品であり、この二つを同時業者が提供していることから、個々の商品の品質を上げることは難しい。特に、アクティビティとお部屋の準備が優先であり、食に対する優先順位は低くなる。それを解決するには、事業者に食事の向上を求めるだけでは解決にならず、外食の体制を充実させたり、島の一次産業の復活によって地元食材の活用を可能にするなど、地域全体での解決策を考える必要がある。
- ・ 国立公園満喫プロジェクトが地域の行政の取組を後押ししていると実感した。

○質疑応答

【涌井座長】

- ・ 委員の意見を集約すると、重要な点はいくつかに絞られる。コミュニケーションの手段は正確であるべきということ。廃屋の問題、二次・三次交通の問題も共通していた。
- ・ 水平的な人数の議論ではなく、そこに消費を加えた立体的な構造、すなわち体積を経済効果として求めるべきだということ。来訪者の人数を増やすのもいいが、いかに単価を高め、体積を追及していくべきかを考えた時に、マスツーリズムなのか、あるいはエコツーリズムなのか選択しなければならない。
- ・ 欧州では、ほとんどプラスチックを使わなくなった。少なくとも国立公園においては、ある種の矜持を示すのは必要ではないか。そういう意味での真のエコツーリズムとしてどうしていくか検討が必要。

【江崎委員】

- ・ ハード面の整備は進んできているが、実際に進んでお金を使いたくなるような場面が視察の中であったのかを知りたい。来訪した観光客が、自然に喜んでお金を落とすような雰囲気は各公園で醸成されつつあるのか。

【涌井座長】

- ・ 本質は事柄の消費なのか、施設利用消費なのか、時間消費なのかというところかと思う。国立公園であればこそ、生きていることを実感できるような非常にリッチでゆったりとした時間消費が実現できるのではないか。

【星野委員】

- ・ エコツーリズムに関して、例えば海女小屋や養殖を見学するツアーがある。単に見せるだけでなく、なぜそこで養殖が行われているのか、養殖に向いているのかまで説明されており、いいコンテンツになっていた。提供者はよく頑張っている。だが、ビューポイントも含めた魅力のフィット感が高めるべきだし、コンテンツを提供する場所がそれぞれ離れているのが問題だ。手軽に移動できる手段を考えなければならない。
- ・ 提供している人の後継者がいないことも課題だ。次の世代を育成していかないと、サービスが継続できない。今取り組んでいるのはカリスマ性のある方々だが、そういった人材がいなくなったあとはどうなるのか。継続性を考えたときに、もっと採算性のある事業体にし、受け継ぐ若い世代が入り、幅広い人ができるようにしていかなければならない。

【石井委員】

- ・ 廃屋問題にはずっと関心がある。国際観光旅客税が導入されると、年間 400 億円ほどが集まる予定。本格的に観光立国を目指し始めるこのタイミングで、このような資金を用いて撤去していくべきではないか。
- ・ 二次交通も課題。二次交通の問題は、すなわち白タク問題と言える。一方で、三重県の南方の地域では小規模タクシー会社がたくさんあるが、地元の人々が白タクにあたらない形でライドシェアにするという取組みを実施している。現地では、車に乗りたい方も運びたい方もいるが、それをうまく繋げる人がいないということが地域の中で課題として認識されている。

○事務局から資料 3-1、資料 3-2 に基づき説明

【涌井座長】

- ・ 中間評価において、8 公園の現実がどうなっているのかを明らかにし、共通の課題を抽出した。あわせて政府目標の 1,000 万人ということを考えた上で、8 公園のみならず 3 箇所の国立公園でも取組みを進めていくこととしている。
- ・ その際に、共通課題となってくるのが「民間活力の活用」である。ハードの部分では「多様な宿泊体験」「公共施設の民間開放」「民間事業者とのふさわしい連携のあり方」について、ソフトの部分では「コンテンツの磨き上げ」「引き算の景観改善」「公園内のインフラ改良」、加えて「人材育成」と場合によっては「利用者負担の制度」について検討していく必要がある。
- ・ また、最終的には「自然公園の制度の見直し」も含めた新たな方向性を検討していく。
- ・ 以上が中間報告の骨子であると理解している。

【石井委員】

- ・ 8 公園については、全国のインバウンドの平均値を超えている。つまり、国立公園満喫プロジェクト自体はうまくいっていると言える。ただ、数値目標の 1,000 万人を達成するためには、大箱である 3 つの公園をどう伸ばすかが重要となる。
- ・ 実際のところ、支笏洞爺は「定山溪」、富士箱根伊豆は「山麓利用」を伸ばすことがポイントであり、何をやればうまくいくかははっきりしているので、その部分をしっかり押さえていくことが大事。

【江崎委員】

- ・ 霧島錦江湾と慶良間諸島に行って感じたことだが、自然がすばらしすぎて、来訪者のターゲットが絞られすぎている。もっと楽しみ方は色々あるのに、慶良間はダイビング、霧島は登山だけに目的が限定されている。楽しみ方の多様性がないと、これ以上（観光客を）増やすのは難しい。

- ・ 民間活力の活用に関して、活力を出そうと思っている人たちをつなげてあげることも必要。行政の人たちは交流の機会が色々あるが、今伸びている民間の人たちの交流、お互いの刺激になる機会があると良いと感じた。

【星野委員】

- ・ 中間報告を見せていただき、共通した課題が多いと感じた。具体的には、「満足度」「二次交通」「景観対策」「多言語化」など。そうした際に、今後成果を出していくには、ノウハウの横展開が大事となってくる。
- ・ 満喫プロジェクトを進めていく際、「基本をきちんとやること」、その「パッケージ」がとても大事だと感じている。例えば多言語化については「日本人と変わらない情報量にする」、トイレについては「100%という数値目標を立てる」、民間活力の活用については「エコロジカルな、国立公園内の事業にふさわしい運営のガイドラインを定める」ことなどを設定できないか。
- ・ 加えて、キャッシュレスは顧客にも事業者にも Win-Win の関係になるので進めるべき。また、電気自動車の活用など、さすが日本と思ってもらえるような取り組みを進め、さらに横展開していけるとよいと感じた。

【野添委員】

- ・ ビジターセンター担当者が外国人からヒアリングした日本の国立公園の不満点に、「トレイルの数が少なすぎる」というのがある。1~2 時間、半日、1 日と過ごし方の選択肢を増やすことも必要。
- ・ また、国立公園満喫プロジェクトでは、ハードの整備が多い印象が強い。ただ、新しい物を作って施設・設備の数が増えるとなると、また空き家・廃屋が増えてしまうことにもつながりかねない。もう少しソフトの面での取り組みが増えるとよいと思う。

【アトキンソン委員】

- ・ 要するに「賢くやりましょう」ということが一番のポイント。
- ・ 例えば、目の前にトレイルがあってハイキングが出来るのに、入り口に印がないので分からない。そうしたことがたくさん起きている。指摘をすると「外国人目線で面白いです」と言われるが、国籍の問題ではなく「気づき」の問題。お客の目線に立って頭を使っているかいないかの違いで、本来、ベンチがあった方がいい場所が何処かは、子どもでも分かる簡単な話のはずである。
- ・ 基礎的なミスが多すぎる。せっかく良い評価が得られるはずなのに、くだらない部分で評価を落としている。簡単なところの改善から評価は上がっていく。京都の二条城はバスの乗降場を移して、大手門を見やすくしただけで、入場者数が過去最高となった。誘客キャンペーンをした、PR 動画を作った、とかそういうことではない。目の前にある課

題に解決策を打った方がよい。

- ・ 日光でも、駅を出てから東照宮がどちらにあるか分からない。ビジターセンターうんぬん以前の話。

【涌井座長】

- ・ ユーザー目線でしっかり賢く考える、そして地道なことをきちんとやるべきという話をいただいた。
- ・ さて今回の中間評価だが、これをきちんと固めていかないと次の段階にステップアップができない。ここで私の意見も少しお伝えしたい。
- ・ 国立公園のツーリズムは、サステナブルツーリズムの規範であるべき。国立公園での評価が日本の評価にもつながってくる。その意味で、中間評価を「基礎的な問題・課題」「短期的な目標」「中長期の目標」にしっかりとカテゴリズして整理してもらいたい。
- ・ 短期的な目標は、本日のモデル公園の議論の中でずいぶん抽出がされたと思う。一方で、中長期の目標において欠けていると思われるのは、自然公園計画の見直しが書かれている中で、どのような広域的な連携を図り、計画論の中で整理するのか。それが制度上で簡単でないなら、運用準則などできちんと謳えるような、そうした議論を引き起こせるようなまとめを中間評価の中に入れ込んでおくことが重要ではないか。
- ・ 今後考えていかななくてはならないのは、ハード、ソフト、オペレーションの課題をどう整理するのか。そして同時に、空間論としての国立公園計画の中でそれをどう考えていくのか。言ってみれば、マナーと規範、お作法のようなものを我々自身がもう1回確認することが非常に大事で、そのことがサステナブルツーリズムに原点になっていくものと思う。
- ・ 加えて、もうひとつ欠けている視点が「BCP」。何か災害が起きた際に国立公園としてどう対応するのか。各公園で既にそうしたものはあろうかと思うが、改めて検討していただきたい。
- ・ 中間評価にあたっては、まとめを座長に一任いただきたい。

○とかしき副大臣挨拶

8つの公園に出向いていただき、具体的にご指摘をいただいたこと、ありがたくお礼を申し上げます。2020年までに訪日外国人の国立公園利用者数を1,000万人するという目標を掲げているが、これでいいのかと感じ始めている。満足していただく方を増やすという点を重視しなければいけない。国立公園満喫プロジェクトは、まだ第一ステージの段階で、インフラ整備やサービスの向上に取り組んでいる。多言語化やトイレの様式化など、単純なことは頭を使ってきちんと対応したい。第二ステージでは、経済性をどう持たせるかが重要。経済性を持たないと継続できない。経済性が出てくると、より魅力が掘り起こされ、民間も参入してくる、というような経済のいい循環を生み出したい。そろそろパワーを循環させるた

めにはどうすればよいかという点も手掛けていきたい。また、国としての環境に対する考え方が端々に見られるような工夫も重要であると感じた。さらに、近くの市民の方や企業の方をどう取り込んでいくかというインナープロモーションについても考えていきたい。赤壁の電気の件についても検討させていただきたい。本プロジェクトの中間評価を踏まえて、次回の有識者会議で今後の方針を定め、ステップアッププログラムを改定して取組を進める予定。今後も忌憚のない意見を頂きたい。

以上